

FLP

(Faculty-Linkage Program)

特集

学部を超えて 専門分野を極める 5つのプログラムで 実践的に学修

FLP(ファカルティリンケージ・プログラム)とは、学部の枠を超えて専門分野を極めるマルチスペシャル育成プログラム。「環境」「ジャーナリズム」「国際協力」「スポーツ・健康科学」「地域・公共マネジメント」の5つのプログラムがあり、2年次から履修できる。ゼミではどんな学修が行われているのだろうか。各プログラムから、それぞれひとつのゼミを紹介する。

環境プログラム

ヘッセスティーブゼミ

地球温暖化対策で温室効果ガスの

が、「環境」プログラム。

排出量削減が国際的課題になるなど、社会経済システムがもたらしている環境問題をあらゆる視点から学び、解決のために社会がどのように

取り組んでいけばいいかを考えるの

そのひとつ、ヘッセスティーブ

ゼミは、2年生から4年生まで3学年合同で行われている。担当のヘッ

◆英語で行われるゼミ◆

セ法学部教授は、米バードン・モント法科大学院卒で環境法、環境政策が専門。ゼミは基本的に英語で行われる。

前期最後のゼミの様子取材に、教室を訪ねた。はじまる前から教室は、にぎやか。ゼミ生同士が和気あいあいと話し合い、仲の良さが伝わってくる。ゼミは、二つの教室に分かれてはじまった。ヘッセ教授は、二つの教室を行き来しながら、時折質問を交えて指導する。

ゼミ生は、環境について自分の興味のあるテーマを選び、3、4週間かけて調べて、手書きのポスターやパワーポイントにまとめて発表する。発表までは毎週、調べてきたことを数人のグループに分かれて報告しあい、互いに質問やアドバイスをし、研究内容を深めていく。

◆研究テーマは自由◆

ゼミによっては研究テーマの範囲が決まっているところもあるが、ヘッセゼミはそのような縛りがなく、

環境に関することならどんなテーマでもOKだ。

この日、ゼミ生が発表した研究テーマは、クラゲの大量発生や海洋酸性化問題などさまざま。教室のテレビに、前もって準備してきた写真やグラフなどを映し出し、パワーポイントを使って発表する。発表者は英語で説明し、資料も英語でつくられている。

発表は、一人10分ほど。一通り発表が終わったあとは質疑応答だ。ゼミ生は互いに名前呼びあう。気心通じた仲だが、決してだらだらした雰囲気にはなっていない。

ゼミ生は、発表のトピックに関して知っていることなど自由に発言する。質問は日本語でもよく、発表者が発表の内容を日本語で要約して説明することもあり、内容を理解することに重点がおかれている。

◆英語力はやる気あれば大丈夫◆

ゼミ長の高橋尚寛さん(商学部4

年)の研究テーマは、「アラビア半島の水問題」。水を確保することが難しい土地で、海水を淡水に変える技術や、現地で日本企業がどのように関わっていったらいいかなどを研究している。



高橋尚寛さん

「英語が使いたかった」高橋さんは、FLPを選ぶとき最初は国際協力プログラムにしようと思っていたところが、ネイティブの先生のゼミが無かったため、「小学校のころから空き缶を集めたり、自然と環境を意識していた」こともあって、環境プログラムの中からヘッセ教授のゼミを選んだ。

ゼミは基本的に英語で行われるので、英語力が気になるが、「やる気があれば大丈夫。(英語力に関し

て)特に基準はないです」と高橋さん。さほど気にしなくてもよさそう。3学年合同でゼミをすることも、みんなで話しあって決めたという。「ゼミ生の数だけトピックがある

ので、発表では、こんなものも環境問題なんだと思う。それを聞くのがおもしろい」とゼミを楽しんでいる。

◆明るくフレンドリーな雰囲気◆



ヘッセ教授の指摘を熱心に聞くゼミ生

「先生が明るくて、とつても楽しい。ファミリイのような雰囲気」というのは、もう一人のゼミ長の遠藤綾乃さん(総合政策学部3年)だ。「何かひとつのことを深めようと思って、FLPに応募した」という遠藤さんの今年の研究テーマは「原子力」。「エネルギーに興味があったから、危ないと言われている原子力発電を推し



遠藤綾乃さん

進めていいのかなと思ってテーマにした」という。今はスウェーデンの政策転換に注目して調べている。

夏休みは、「地球環境のために実際に活動してみよう」と思い立って、ドイツでのワークキャンプに参加し、環境保護の活動を行った。「研究は文献を探したり、調べたりするのが大変だけど、自分の興味を持ったことを調べられるので楽しい」と遠藤さん。

学部でもヘッセ教授のゼミを取っているという本山裕美子さん(法学部2年)は、「フレンドリーな雰囲気がとっても好き」とヘッセゼミの魅力を紹介してくれた。

(学生記者 野崎みゆき)法学部2年

ジャーナリズムプログラム

松本正ゼミ

◆マスコミへの登竜門◆

マス・メディアの世界で活躍するための専門知識と広い視野を身につけるのが、ジャーナリズムプログラ

ラム。長谷川如是閑や杉村楚人冠といった著名なジャーナリストを輩出

した中央大学の伝統を継承しようと、ジャーナリズムプログラムにはいくつかのゼミがあるが、そのひとつ松

本正ゼミは毎年多くのゼミ生をマスコミに送り出している。

真剣な眼差しでゼミ生の意見を聞く松本正特任教授

2009年度までに朝日新聞3人、読売新聞3人、毎日新聞1人、NHK1人……といった具合で、マスコミへの「登竜門」ともいえるそうだ。担当の松本正・総合政策学部特任教授は、朝日新聞の社会部長、編集局長を歴任した元新聞記者。次代のジャーナリス

ムを担う人材を育成するため、報道現場の実務に接した授業を行っている。

◆「政権交代」をテーマに議論◆

松本ゼミは2、3、4年次合同で行われ、今期は土曜日に開講。驚きなのは、授業時間が5〜8時間という長時間であることだ。午後からはじまったゼミは、深夜にまで及ぶことがある。

ある土曜日、ゼミが行われている教室にうかがった。この日のテーマは「政権交代」。先の衆院選挙の結果、政治の局面が大きくかわったことを早速テーマにとりあげていた。1つのテーマを1日で完結させるのが大きな特徴で、それだけにゼミの時間が長い。

松本先生が「今回の政権交代はなぜおこったと思う？じゃあ○○さん」とゼミ生に質問。生徒が困惑しながらも答えると、松本先生は「もうちょっと具体的に。分かりやすく

説明できない？」と注文をつけた。生徒の答えを待つてから、先生は黒板に図を書き始め、政権交代にいたるまでをわかりやすく説明した。先生が説明している時々笑いがある。教室の雰囲気は和やかだ

松本ゼミは3本柱で成り立っている。①時事問題について800字程度の文章を書いてきて、授業中に先生、ゼミ生で一人一人の文章を批評する②時事問題に関するディスカッションをする③日野市で活躍する人を取材し、市内のASAが発行するミニコミ紙に載せてもらう活動である。

◆志をもって松本ゼミへ◆

ゼミ生のひとり、成田大昭さん(文学部4年)は、来春の朝日新聞社への就職が決まっている。「ジャーナリズムの入口に立てたのは、松本正さんのおかげです」という。

成田さんは、大学受験の浪人中、受験勉強のためにニュースを見始



め、新聞も読むようになってからジャーナリストを目指すようになった。「日々の出来事をテレビのニュースや新聞の向こう側に記者がいることを感じ、その影響力の大きさに憧れをもった。ジャーナリストは世論形成をおこなう重要な存在だと感じた」という。

昔から目立ちたがり屋だった成田さんは、民主主義社会の維持、発展に多大な影響を与えるジャーナリストという仕事に就きたいと考えるようになり、中央大学入学後、FLPジャーナリズムプログラムの松本ゼミに入った。



「実務を学びたかった」と
成田大昭さん

常に把握していかない
ればならない。ミニ
コミ紙の作成は、取
材の実務を経験する
ことが目的で、成田
さんは「何度も先生
からダメ出しをもら
い、繰り返し取材に
出向くことが多かつ

◆ジャーナリストの実務を勉強◆

松本ゼミを選んだ理由は、「ジャーナリズムの学術的研究よりも実務を学びたかった」からだ。「松本先生は、ジャーナリストとして大切なことは、国内外の事実関係を把握して、論点を整理し、本質を見極めることである」と強調。その上で、文章に關しては、「コミュニケーションツールなのだから、わかりやすく、人がとびつような文章を書かなければならない」と常に指導しているという。ゼミ生は毎週800字の文章を書くために、国内外の様々な出来事を

た」という。

「松本ゼミはジャーナリスト採用試験のゼミナーではなく、ジャーナリストになった後、その責務を果たすための準備の場所なんです」と成

国際協力プログラム

林光洋ゼミ

◆途上国の貧困問題を研究◆

国際協力プログラムは、国際社会が抱える最も深刻な課題である「貧困問題」の解決に挑戦するため、基礎的な専門能力を有する人材を養成することを目的にしている。その中のゼミのひとつ、林光洋・経済学部教授が指導するゼミは、現地調査、研究などの実践的な活動を通して発展途上国の貧困問題に取り組んでいる。

ゼミは、2、3、4年生の学年別に行うとともに、2年次後期以降から4年次までは、林教授が経済学部でもっている林ゼミとも協力して合

田さん。それだけに、志を持って将来を見据えているゼミ生が多いと感じた。

（学生記者 橋本あずさII 法学部2年）

同ゼミを行っている。

林ゼミの最大のイベントは、3年次に行っている海外現地調査だ。9月前半の2週間ほど実施、今年は8月30日から去年と同じくフィリピンに赴いた。

国選びからはじまって調査対象の選定、研究計画書の作成、現地調査先のアポイントの取り付け、宿舍や交通手段の手配、帰国後の英文での研究論文作成まで、すべてゼミ生が行う。

◆フィリピンで現地調査◆

今年の2月ごろから現地調査の活動を始め、色々な意見をすり合わせ



今年のフィリピン現地調査で ADB 訪問

た結果、今年の調査内容は「マクロファイナンス」「BOP(Bottom Of Pyramid)」「保険」「水」の4つのテーマについて調査することを決めた。

「出発を2ヶ月近く後に控えた7月上旬になっても準備は40パーセントほどしか終わっていないかった。大変なのはアポイント取りです」とゼミ長の藤倉弘和さん(経済学部3年)。

地でアポイントが急にとれて、慌ただしく取材することもありました」と振り返る。20カ所以上を訪問調査したという土本さんは、「現場を見ることがの重要さを改めて認識しました。また、現地の人達が、訪問先企業の貧困層向けプロジェクトによって供給されるようになった綺麗な水を飲んで、喜んでる姿を見て、やっ

「アポイントも英語でとらなければならぬ。それに加えて、海外の訪問先の企業や団体が過去にそういうアポイントを求められた経験がない場合が多いので、手こずることが多い」という。

昨年、フィリピンで

現地調査を行った4年生のゼミ長、土本雅彦さん(法学部)は、「予定通りには、なかなかいきませんでした。現

てよかったですと思いました」と語る。

◆フェア・トレードのイベント開催◆

もうひとつ大きなゼミ活動は、2年次に行く11月の白門祭での「フェア・トレードカフェ」と、「フェア・トレード講演会」の開催だ。フェア・トレードとは、発展途上国でつくられた作物や製品を適正な価格で継続的に取引することによって生産者の

自立や持続的な生活向上を支える仕組みのことである。

白門祭でのフェア・トレードカフェは、フェア・トレード団体から購入したコーヒー豆を使ったコーヒーを提供したり、フェア・トレード製品を展示したりする。フェア・トレード講演会には講師を招き、フェア・トレードに関する講演を行う。



左から土本さん、入江さん、藤倉さん

2年生ゼミ長の入江遥さん(経済学部)は、「フェア・トレードは国際協力の面もあるが、フェア・トレード製品を購入すること自体が、貧困問題を考えるきっかけになる。この活動を通して、色々な人にフェア・トレードについて知ってもらいたい」とフェア・トレードカフェと講演会開催への意気込みを語った。

◆上級生と下級生の連携も◆

林ゼミでは他にも、フィリ



海外現地調査の打ち合わせをする林ゼミ

ピン大学の留学生、オーストラリア国立大学の交換留学生に参加してもらい、英語のテキストをつかって授業を実施。また、情報を上級生から下級生に伝えるため引き継ぎ会を開催し、先輩、後輩の縦の連携を深めている。
 (学生記者 堀滝登Ⅱ文学部2年)

◆スポーツ・健康科学プログラム

村井剛ゼミ

◆スポーツを多面的に理解◆

スポーツは健康の維持増進をはじめライフスタイルに密接に関わっているばかりか、国際交流、国際貢献に果たす役割も増大するなど、社会的ニーズは多様化している。そうした中で、「スポーツを健康、医療、文化、ビジネス、サービス、行政などとの

関連の中で多面的に理解し、その発展に寄与する人材の育成」を目的にしているのが、スポーツ・健康科学プログラムだ。

その中のひとつ、村井剛・法学部助教のゼミは、スポーツに関する認知・心理的側面を理解していくことを主眼にしている。ゼミ生は、現在4人で全員が2年生だ。ゼミは、

前期は参考文献を読み進め、自分たちが興味を持つ課題を見つけ、後期にはその課題について具体的に実験などを通して調査し、知識を整理していくかたちで進められている。

◆野球の実験調査◆

ことし、ゼミ生4

人が課題に選んだのは2つ。ひとつ目は、野球のピッチャーとキャッチャーとの関係で、ピッチャーは的(まと)、つまりキャッチャーミットが大きければ大きいほどストライクが狙いやすいかどうかについての調査だ。実験は、野球経験者に協力してもらい、1人8球ずつ投げてもらって、結果をみることにした。



野球の実験調査をするゼミ生

2つ目は、野球選手のルーティンワークと打率との関係だ。これは、イチローのような毎回打席に立つてからの行動パターンが一貫している人と、そうでない人とのそれぞれのパフォーマンス(打率)の関係を調べることにした。

先行研究より、パフォーマンスが
高い人ほど、打席に入る前と入って
からの行動パターンが一貫している
のではないかとの推測に立って、プ
ロ野球の試合を分析していくことにな
った。夏休み中に行った調査では、
巨人―広島戦を観戦。巨人の小笠原
選手とラミレス選手、広島の栗原選
手の3人を観客席からビデオ撮影し
た。ゼミ生は試合展開をほとんど見
ずに、「足もとに三脚を立て、一人
一人をカメラで追っていくのは非常
に大変だった」という。

◆スポーツ心理に興味と関心◆

ゼミ生の一人、池本泰尚さんは、
「小学生からずっと野球をしてい
て、『メンタルが弱い』と言われ続
けた」という。そこで、「メンタ
ルとスポーツの関係について興味を
持ち始め、またそれを勉強すること
で、自分のパフォーマンスの向上に
も活かしたかったので村井ゼミを選
んだ」。

「普通のゼ
ミであれば、
既存の研究を
確かめるとこ
ろで終わって
しまう。だけ
ど、村井ゼミ
は違う。その
既存の研究か
ら、自分たち
の課題を見つ
けてそれを研
究することができる。また、
先生との距離
がとても近く、
親近感を持つ
て。好きなこ
とができて、
とても楽しい
ゼミです」と池本さん。
村井先生は、34歳。ゼミ生にとつ
ては兄貴分のような存在だ。



村井先生（右端）とゼミ生

小松高弥さんは、「緊張症になるこ
とが多くて、スポーツ心理学に興味
があった。その両方を同時に学べる
と思つて村井ゼミに入った」という。
一方、スポーツを応援する立場か
ら村井ゼミを選んだのは、河野快さ
ん。サッカーが大好きで、サポーター
の熱狂的な応援が選手にどのような
影響を与えているかについて興味を
持っている。

文学部で心理学を専攻する井上亜
紀さんは、心理的な側面から、さま
ざまなスポーツ現象に関心をもつて
学習に取り組んでいる。

「村井ゼミは一人ひとりが何かし
らの目的をもち、自分で課題を見つ
け、そこから何かを得ていくことが
できる」と4人は口をそろえる。

今年のふたつの課題に関する実験
を踏まえた研究成果は、来年1月下
旬から2月上旬に開催予定のゼミの
期末交流会で公表することにしてい
る。

◆今年度中に実験成果発表◆

北海道出身で、小学生のときから
アイスホッケーをやっているという

(学生記者 今子佳奈 文学部3年)

地域・公共マネジメントプログラム

黒田絵美子ゼミ

◆音楽祭『半熟TAMAGO』主催◆

黒田ゼミは10月4日(日)、多摩センターのバルテノン多摩きらめきの池野外特設ステージで音楽祭を開いた。音楽を通じて地域の人たちが触れ合う機会を提供しようという目的で応募した企画案が、場所を提供した財団法人多摩市文化振興財団に採用されたのだ。

企画から出演者への依頼、機材の手配、広報、当日スタッフの募集、そして運営とすべてをゼミ生が行った。テーマは「半熟TAMAGO」。出演者も主催者もまだまだ「半熟」ということでネーミングした。

黒田ゼミはスタートとして2年目で、3年生3人、2年生4人の小人数のゼミだ。それだけに、結束力は強い。第1期ゼミ長、林田泰子さんと第2期ゼミ長の加藤悠さんは、ゼ

ミをまとめながら、音楽祭の開催準備に走り回った。

「文化を通じた多摩地域の活性化



加藤さん(右)と林田さん(左)

「化」を目指した音楽祭の主催は、これまでゼミで勉強してきたことをいかにするには、またとない機会になった。

◆経験なく、機材手配に苦労◆

「6月から7月にかけてかけずり

回つても出演者は思うように集まらなかった。出演依頼してもどこでも断られ、苦労しました」と加藤さんだが、インターネットや張り紙など地道な活動を続けた結果、中大のバンドサークルやアコースティックギター同好会だけでなく社会人バンドの参加者も決まった。

夏休みは広報・宣伝活動に力を入

れた。宣伝活動以外にも課題は山積みだった。ゼミ生が少ないため、当日のスタッフはボランティアを募集しなければならなかった。当日のタイムテーブルの作成、限られた資金の中での機材手配など、今までに経験したこの無い難問に直面した。

特に機材手配は、音楽経験者がゼミ生にいないため、経験者にあたってアドバイスを受けながら、ひとつひとつ解決していった。「実際に出演者や場所を提供してくれた財団の方に会って話をする大切さが分かった」とゼミ生は口をそろえて話してくれた。

担当の黒田絵美子・総合政策学部教授は、英米演劇が専門で戯曲の翻訳はじめ、創作劇の執筆・演出、それに日本の伝統芸能である落語の創作も手がけている。

◆劇場、寄席をフィールドワーク◆

ゼミでは、「演劇の教科書」という本を読んだり、作品を上演するま

での課程を机上シミュレーションしたりする。また、ゼミの時間外には

劇場や寄席に足を運び、公演関係者に聞き取り調査をしたり、劇場周辺の町や観客の状況を分析するなどの



黒田教授（右端）と打ち合わせするゼミ生

フィールドワークを行っている。林田さんは、「今までに見て回った劇場は通路が狭いうえに、一歩劇場の外に出ると、たちまち無機質な街並みが広がっていて余韻に浸ることができない」との調査結果から、「観客がくつろげる劇場」について考え

るようになったという。一方「共同体研究」に興味があった黒田ゼミに入った加藤さんは、主に、その場に居合わせる人たちが感情を共有できる「演劇のパワー」について研究している。落語で「もんじゃ焼」がテーマに取り上げられないことに疑問を感じ、もんじゃ焼の歴史について徹底的に調べ上げたこともある。

◆今春には手作りで落語会開催◆

個別学習だけでなく、ゼミ生全員でひとつのテーマに取り組んでもいる。映画関連企業が公募した「映画館の動員を増やすためにはどうしたらよいか」という課題に対し、戦略案を考えて応募した。

「おためシネマズ」としたその戦略案は、劇場の来場者に映画だけでなく、化粧品会社や飲料品会社と提携してサンプル品を提供することで、来場者数を伸ばしていこうというものだ。しかし結果は「惨敗でした」

と林田さん。

この春には、埼玉・川越市で小さな落語会を3年生の3人が企画して開いた。広報、財政と役割を分担し、出演者依頼から会場の確保、予算編成まですべて手作りで行った。3人は「自主的に動かなければ何も始まらない。チャレンジする大切さがあった」という。

林田さんと加藤さんは、「黒田先生はゼミ生を尊重し自分たちのやりたいことを研究させてくださいます。そのうえで的確なアドバイスをくださるので、調査・研究が楽しくなります」と口をそろえた。

（学生記者 池谷祐宣Ⅱ商学部3年）

